
妖精の神が生きる道

ユナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精の神が生きる道

【Nコード】

N1817Y

【作者名】

ユナ

【あらすじ】

鉄骨につぶされて、転生することになった私。まあ、とりあえず一生懸命生きてみよう。あ、その前に修行だな。死なないためにも。当分フェアリーテイル関係ないです。ものすごい下手です。それでもいいという心優しい人は、読んで頂けるとうれしいです。

妖精の神が生まれる前（前書き）

下手な小説です。それでもいいという心優しい人は読んでくれると嬉しいです。

妖精の神が生まれる前

「危ない!!」

上から声が聞こえる。何が危ないんですか？そう聞こうとしたとき、何か大きいものが落ちてくるのに気がついた。鉄骨だ。避けなくては。頭では理解している。でも、怖くて動けない。逃げなくては。逃げなくては。

ドサッ

あ・・・れ・・・？からだか・・・う・・・ごけない・・・？

「女の子が鉄骨につぶされたぞ!」「誰か!救急車を!」

大丈夫。そんな簡単なことが言えない。なんで？なんで？そして・・・私は意識を手放した・・・どこかに引っ張られるような感覚を持ちながら。

「あれ・・・?」

何故、感覚があるんだろう。私は死んだはずなのに。

「おー、起きたか。」

「だれ・・・?」

「俺はイーリス！神だ！よろしく！」

私は、とうとう頭がおかしくなってしまったのだろうか。それとも、この目の前にいる人間の頭がイカれているからなのだろうか。いや、きつとそうに違いない。

「いや、違うから！お前の頭がおかしくなったわけじゃないし、ましてや俺の頭がイカレ

ているわけじゃないから！俺、本当に神だから！」

「はいはい、それで、自称神が私に何のよう？」

意味がないとゆうことだけは、絶対にないだろう。

「自称じゃない！って、話がずれたな。話を戻そう。お前は、鉄骨でつぶされた。本当は、記憶喪失だけですんでいたはずだったんだ。しかし、お前は打ち所が悪く、死んでしまった。そこで、お前にはフェアリーテイルの世界に転生してもらう。」

「え・・・マジ？」

「うん。マジ。」

「フェアリーテイルといったら、私が一番好きなアニメじゃないか！」

「ああ、あと、そこで生きるための願いや質問は、いくらでも受け付けるぞ！」

「えーと、それじゃあね、カードキャプターさくらのクロウカード全53枚をまずちょうだい。」

「了解。あ、でもさあ、」

「何？」

「俺が出来る転生は赤ちゃんからだから、これ、どう渡す？」

「ああ、それじゃあさあ、クロウカードを私の体内に取り込んで、能力系の魔法として使えないかな。ハッピーの「エーラ」みたいにさ。」

「それなら可能だな。んじゃ、これ。」

「これ、なに？」

出てきたのは、透明な、グミみたいなもの。

「ああ、俺は、道具以外のものは、こうやって渡すことにしているんだ。」

「ふーん。ま、どうでもいいや。いただきます。」

「で、他に欲しいものは。」

「めんどいから一氣に言うよ。念じたら、その通りのものが出来る能力。あと、治癒魔法。あと、フェアリーテイルの世界での語学の知識と、様々な魔法に関する知識。あと、身体能力は、最高レベルにまであげといて。他には、アースランドで1番の魔力。そのままじゃかなり危ないから、封印できる魔法もつけといて。あと、治癒のスピードを、格段に上げといて。それと、かなり正確な記憶力。それと、フェアリーテイルのアニメの知識は、放送されるたびに頭に入れさせといて。そのくらいかな。」

「そのぐらいって・・・。」

「イリスが、私をあきれたような目で見る。まあ、多すぎたかもしれないな。ま、いつか。」

「ああ、あとおまけがもらえるぞ。」

「おまけ？」

「そ、おまけ。俺に会いたいと思いついたら、俺に会える。」

「ふうん。でも、何でそんなものがいるの？」

「能力を変更したかったりするだろ。その時のためだ。」

「ああ、あとさ、何で私の記憶って、あやふやなの？」

「鉄骨につぶされたとき、軽い記憶喪失になったみたいだな。」

「へえ。」

「ああ、あと、お前の名前と容姿、どうする？」

「名前はルエ。名字はどうでもいい。容姿は目と髪の色は栗色。」

「了解。ああ、あと、これやるの忘れてた。」

「ああ、この透明なグミみたいなやつ、また出てきた。ま、食べよう。食べ終わったみたいだな。それじゃあな。」

「バイバイ。イリス。」

「言い終わった瞬間、私から光りが発せられ、そのまま意識を失った。」

妖精の神が生まれる前（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

妖精の神が産まれたとき（前書き）

前にも増して下手になってるーーーー！

妖精の神が産まれたとき

「うわああああああああん（いったゝい）」

「生まれたわ！」

「生まれたのか！」

「おめでとうございます。元気な女の子です！」

「あなたの名前はルナ。ルエ プローラスよ。」

「あゝ（へゝ）プローラスって名字なんだゝ）」

「あゝ（なんか、異様に眠い・

・・）」

「おい！起きろ！」

「あ、イーリス！」

「あのな、ルエ、俺、お前に謝らなくちゃいけないんだ。」

「ん、何？」

「転生の衝撃にお前が耐えられなくて、現実では眠り病みたいな状況になっちゃってしまっているんだ。」

「ふうん。どのくらい？」

「お前が産まれてから、2年と6カ月だ。」

「・・・うそーーーーーっ！」

「すまん・・・。」

「すまんじゃなーーーーーっ！」

「とゆうわけで、お詫びに、この空間で修行を許そうとおもった。」

「もういいよ・・・。」

「まあ、一応現実に戻すぞ。」

「じゃね・・・。」

前みたいに光が出て、意識が遠のいてきた。

「ああ、あと、お前の近くに他の転生者が2人いるから」

え・・・、おい

「ちよつとまでや――――！！！！！！」

妖精の神が産まれたとき（後書き）

読んでくれた人、ありがとうございました！！

妖精の神が目覚めたあと（前書き）

矛盾している・・・

妖精の神が目覚めたあと

「ちよつとまでや——！！！」

あ、あれ？もしかして、現実世界に帰って来ちゃった？目さめた直後にさげんでた？

「ル、ルエ？」

この人はまさか・
・
・

「お母さん？」

この世界のお母さん、すみませーん。あのくそ神、今度会ったらだじゃおかんぞ。

「ルエ！目が覚めたのね！」

「お母さん……」

「あなた、2年と6カ月ほど眠ってたのよ！もう、起きないんじゃないかと思ったわ！」

「お母さん……苦しいよ……」

お母さん……力、強いよ。苦しいよ。マジで。

「あら、ごめんなさい。」

「でもね・・・会えて嬉しいよ。」

「ありがとう。あのね、ルエ、あなたに、2人、紹介したい人がいるの。」

「へー、だあれ？」

「1人はあなたと同じ年の女の子。1人は、あなたの弟よ。」

[illegible]

「おどろいた？」

おどろかない人がいたら紹介してよ。

「……その2人の名前は？」

「弟がカイト・プローラス。女の子がティナ・ルミネーナよ。」

「ふーん。2人に会いたいな。」

「本当！？それじゃあ、今から会いに行きましょう！あ、でも、そ

の前に服をきがえましょうね！」
「はい。」

「それが、10年後に至上最強とつたわれた妖精の神とチームメイ
トとの出会いでした。」

妖精の神が目覚めたあと（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます！

妖精の神と1人目の親友との出会い（前書き）

前よりは多少うまくできたかな・・・？

妖精の神と1人目の親友との出会い

洋服に着替えた私は、3つ隣の家に向かっていた。ティナとゆう名の女の子に会いに行く。同じ年らしいけど、精神年齢は私の方が上なんだよな……。仲良くできるだろうか。でも、その子が転生者だったらまだマシかな……。 (とゆう淡い期待をかけてみる。) と、考えているうちに、着いたみたいだ。

「おじゃましまーす。プローランスです。」

「あ、いらっしやい。おや、ルエちゃん、いらっしやい！ティナ！ルエちゃんが遊びに来たよ！」

「はい！」

そうやって来たの女の子は……

「(か、かわいい！)」

お人形みたいだった。マジで。

「初めまして。ティナ・ルミネーナです。」

「初めまして。ルエ・プローランスです。」

なんとなく、私に似ていた。そして、なんとなくこう思った。

「(この子は、転生者かもしれない……。)」

「よろしくね、ルエちゃん！」

「こっちこそよろしくね、ティナちゃん！」

「あらあら、すっかり仲良くなっちゃって。」

「ティナ、お部屋で遊んで来なさい。」

「わかった！ルエちゃん、お部屋いこ！」

「うん！わかった！」

―これが、妖精の神と1人目の親友との出会い。

妖精の神と1人目の親友との出会い（後書き）

感想、お願いします！

妖精の神と2人目の親友との出会い（前書き）

前の話と微妙に似ている・・・。

妖精の神と2人目の親友との出会い

「バイバイ、ティナちゃん！」

「ルエちゃん、バイバイ！また明日ー！」

すんごい楽しかった。何でだろうな。前は人と遊ぶより本とか読んでる方好きだったんだけどなあ。

「ルエ、どうしたの？」

「ううん。ちよつと考え事してただけ。」

「そう。それじゃあ、今からカイトに会いに行きましょうね。」

「はい。」

ぼてぼてと歩いていたら家に着いた。ここのどこにいるんだろう。そんなことを考えているとお母さんがドアを開けた。

「さあ、ここよ。」

入ると、ベビーベッドがあつて、その中に赤ちゃんがいた。目をぱつちりと開けて、「なんだなんだ」みたいな感じで私を見ている。

「（あれ？）」「何か、違う。」

「どうしたの？」

「ううん。何でもない。」

―これが、妖精の神と2人目の親友との出会い。

妖精の神と2人目の親友との出会い（後書き）

読んでくれてありがとうございました！出来たら感想お願いします！

妖精の神の母の日記（前書き）

お母さんの日記です。

妖精の神の母の日記

×月＋日

今日、私の子が生まれた。名前はルエ・プローランス。女の子だ。どんな子に育つのだろう。将来が楽しみ。

×月○日

ルエが産まれてから約1週間がたった。一昨日の昼に寝てから、今日の夜になっても起きない。さすがに寝すぎだと思つた私たちが医者に診せたところ、一種の眠り病だと言われた。命に別状はないらしいが、治療法は分からないらしい。いつ、起きるのだろうか。

○月×日

あの子が眠つてから、約5カ月がたった。近くに、ルエより1カ月遅れて産まれた女の子が引越してきた。ルエが起きたら紹介したい。ああ、あと、その子の名前はティナ・ルミネーナと言つらしい。

×月○日

あの子が眠り始めて丁度1年がたった。まだ、目覚める気配は一行にない。早く目覚めてね。

□月 日

今日、ルエに弟が出来た。名前はカイト・プローランス。元気な男の子だ。この子には、眠り病にかかって欲しくない。それに、早くルエにも目覚めてもらいたい。

月○日

今日、やっと、やっと、ルエが目覚めた。カイトは不思議そうな顔をしていたけれど。

ただ、何故、「ちよつとまてや――――」
 「！！！」と叫びながら起きたのかしら。まあ、あの2人と仲良くしてくれればいいのだけだ。

妖精の神の母の日記（後書き）

ありがとうございました

妖精の神と2人の親友（前書き）

今回は、転生者3人をいつぺんに出しますよ！あ、イーリスも含めてオリキヤラ4人か。

妖精の神と2人の親友

「イーリス？あの問題発言はどうゆうことかなあ？」

「ただいま、イーリス君に質問（？）をしています。」

「ちゃんと説明します！だからその怖い笑いをしまってください。」

「ちゃんと説明しろよ。」

「まずは、カイト・プロランスから。お前が転生して約1年と2カ月ぐらいかな。間違つてある少年を殺してしまつて「また間違つて人殺したの？」ほつといてくれ！！それで、あの世界に転生させた。」

「何で私の兄弟なわけ？」

「なんとなく。」

「……… ドガツ ↑私の足蹴りがイーリスのおなかにクリティカルヒットした音

「もう1人の転生者は？」

「テ……ティナ・ルミネーナです……。」

「やつぱりねえ。」

「え、きずいてた？」

「なんとなくだけどね。」

「「イーリス？どーしたの？つて、え！？」」

後ろを振り向くと。2人のお人形さんがいました。チャンチャン♪

「『チャンチャン♪』じゃないから！ルエちゃん現実見て！」

「おお。何故に考えることが分かった？」

「ティナは、読心術の能力をもらつたらしいからね。」

「ふむふむ。てか、君たち誰？」

「「今更！？」」

「おお、息ぴつたりだねー。」

ちなみに、今ここにいるのは私と、イーリスと、藍色の目と、ショートカットの藍色の髪を持った女の子と、黒色の目と、少し長めの

黒色の髪を持った男の子。

「まあ、今の感じから推測するに、藍色の子がティナちゃん、黒色の子がカイト君かな。」

「「正解。でも、ちゃん（君）はいらないよ。」

おお、またもや息ぴったり。

「まあ、お茶でも飲んでゆっくり話そうよ。」

「え、ここ、お茶とか飲めんの!？」

「うん。」

「と、ゆうわけで、イーリス、お茶とお菓子、さ、いこー。」

後ろでイーリスが「俺がお茶入れんのー!？」とかゆう叫び声をあげてたかも知れないけど、無視無視。さあ、お茶とお菓子だ。」

妖精の神と2人の親友（後書き）

次はみんなのもらった能力や前世の名前などを説明させちゃいますよ！・・・たぶん。

妖精の神と仲間達（前書き）

区別がつかない！特に、ルエとティナの区別が・・・。

妖精の神と仲間達

「おいしー。」ただいま、お茶とお菓子中。

「さて、さつきイーリスから聞いたと思うけど、僕とティナは転生者だ。姉さんも、そうなんだろう？」

「まあねえ。そう言えば、2人はどうして死んだの？これ（イーリス）が間違つて殺したつてのは聞いたけどさ。」

「私は通り魔に刺されて。」

「「うわぁ・・・」」

「僕は、重度の食中毒で。」

「「げえ・・・」」

「その口ぶり、初耳？」

「「うん。死に方なんて興味ないしね。」」

「ひどっ！」

「そう言えば、姉さんは？」

「あれ？死に方興味ないんじゃないかなかったつけ。」

「私たちのしか聞かないなんて、不公平じゃん。」

「そっか。私は、鉄骨につぶされて。」

「「グロッ！」」

思いつきり退かれた。

「ひどいなあ。2人のだって、充分グロいじゃん。」

「「そうだけどさあ。」」

にしてもあんな達、息びったりだね。前世は双子か？

「うっん。赤の他人。」

「ふーん。そう言えば、何でティナは考えてることが分かるの？」

「読心術貰ったの。前にカイトが言ってなかったつけ。」

「・・・そう言えば、言ってた。」

「「はぁ・・・」」

何よその、2人そろつたあきれ顔は。

「さあ、次は能力の説明と行こうじゃないか！」
「イーリス、どっからわいてきた。」
「ここは本来俺の仕事場みたいなどころなんだが・・・」
「私が貰ったのはカードキャプターさくらのクローカードやら何やらかんやら。詳しい話はこれ（イーリス）から聞いてください。」
「スルーしないで！しかも、実行しないで！」
「いいじゃん。別に。」
「「そうそう。」」
「ひどいつ！しかもカイトとティナまで！」
「僕は、選択した魔法を無力化する魔法。」
「スルーすんなあ！」
「私は、水の造形魔法。」
「・・・（泣）」
「「イーリス、お茶お代わり。」」
「・・・了解・・・。」
「あ、そーだ。2人の前世の名前は？私は、世崎 友那。」
「ふーん。ティナは友那って名前なんだ。」
「僕は清木 海斗。」
「カイトはそのまんまなんだね。」
「うん。考えるの面倒くさかったからね。」
「へえ。私は、神月 神奈。」
「「個性的な名前だね。」」
「ねえ、2人とも。」
「「なに？」」
「「ここではさあ。その名前で呼び合おうよ。姿だってそうなんだしさあ。」」
「「賛成！ナイスアイデア！」」
「とりあえず、そろそろ帰った方がいいぞ。」
「「「なんで？」」」
「そろそろ夜明けだからな。」

「『それを早く言え!』」

「じゃーね、また夜にね。友那、海斗。」

「うん。」

そして、私たちは意識を失った。

妖精の神と仲間達（後書き）

次は、みんなのプロフィール書きたいなあ。

妖精の神の現実（前書き）

短い！しかも、プロフィールじゃない！

妖精の神の現実

「くわああああ。」

「あら、ルエ、おはよう。」

「お母さん。おはよう。」

あんまり寝た感じしないなあ。そりゃあ、一晩中話し込んでたんだけどさ。

「あ、姉さんおはよう。」

「うお。カイト、おはよう。」

「さあ、朝ご飯を食べましょう。」

「はい。」

～テイナ宅～

「ティナー。遊びに来たよー。」

「あ、ルエとカイトー。来てくれたのー？」

「うん。」

「さ、ルエちゃんにカイト君。ティナの部屋に行きましょう。」

「はい。」

「何するー？」

「じゃあさあ、かくれんぼは？」

「……ティナって意外と子どもっぽいんだね。」

「ほつとしてよ！それにさ、たまには子どもらしい行動とらないと、お母さん達が心配するじゃない！」

「……『行動をとる』なんて言葉を使っている時点で心配され

と思う。」「

「ひどいよお・・・（泣）」

「しょうがないな。かくれんぼでいいよ。」

「やった！」

「その代わり、鬼はティナね。」

「はい。」

くかくれんぼ終了・夕方く

「ルエ、カイト、帰るわよ！」

「はい。ティナ、また明日！」

「明日！」

妖精の神の現実（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました！

妖精の神と魔法（前書き）

「」は、魔法カッコです。

妖精の神と魔法

「灯「グロウ」。」

えーと、今、あのよくわかんない空間で魔法の修行中なんだけど・

・
「何でこんなに数が少ないの・・・？」

きちんと前に言う呪文？みたいなもの言ったときにはいつぺんに50個ほど出たんだけど・・・

「何で8個ぐらいしかでないのよ」

ぐでぐでって効果音が似合いそうだね。

ちなみに今は、「神月神奈」じゃなくて、「ルエ・プロランス」。何故かというとイーリス曰く『あの姿にした理由は、話しにくいだろうと思ったからだ。あの姿になりたいと思ったら、簡単になれるぞ。』

らしい。

「まあ、アニメほど魔法を使うのは簡単じゃないってことだよ。」

「そりゃあそうかも知れないけどさあ、何でいつぺんに25分の4ほどになっちゃうのさ。」

「知らない。」

「うう。2人そろってひどい。」

「まあ、頑張ればいいんじゃない？」

「だから頑張ってるんですよー。」

「明日からは私もやるし、そろそろ休憩したら？あんまり根を詰めすぎるのも良くないよ。」

「うん。でも、カイトはやらないの？」

「僕の魔法は誰かが魔法を使えるようにならないと修行できないんだよ。」

「あ、そっか。」

「今気づいたの？」

「うっ……」

「話し中失礼だけど、そろそろ夜明けだからなー。」

「いやー、イーリス、すっかり【夜明け告げマシン】になってるな
ー。」

「じゃ、またあとでねー。」

「あとでねー。」

妖精の神と魔法（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました
感想、お願いします！

妖精の神と誕生日（前書き）

誰が話してるのか結構区別つかない・・・。

妖精の神と誕生日

「ルエ（姉さん）、ティナ、お誕生日おめでとう！」

私が目覚めてから半年が立った！つまり、今日は私の誕生日パーティー！ま、ティナも誕生日が結構近いから、合同なんだけどねえ。

「私たちからはこれよ。」

お母さんたちからは、私へは月色のワンピース、ティナへはおそろい藍色のワンピース。

「私（僕）たちからはこれ。」

ティナ&カイトからは水色と赤のリボンが1本ずつ。・・・私たちはセンスが似ているのだろうか。

「これ。」

「何で私だけ『これ。』だけなの！？」

「なんとなく。」

「・・・。」

私とカイトからティナへは、ティナの髪色とおそろいのチョコレートリボン。

「・・・さっきルエが考えてたのはこうゆうことなんだっただね。」

「そうゆうことです。」

ま、少し違うけどね。同じ無地だけど。

～そんなこんなで夢の中～

「イーリス、誕生日プレゼントちょうだい。」

「・・・言うと思った。ほら、これだよ。」

そう言って手渡されたのは、水色と銀色のペンダントのチェーンの部分。

「……これを、どうしろと？」

「水色の方がルエで、銀色の方がティナな。まあ、何か通してくれよ。」

「「りょーかい……。」「」

妖精の神と誕生日（後書き）

カイトが最後の方空気と化してた……。あのチェーン、意味あるんですよ。当分使わないけど……。

ちなみに、この小説は、現実の月日関係ないです。誕生日も然り。

この世界自体の1年が365日なのかもあやふやですしね。クリスマスとかお正月とか番外編書くかもしれないけど。

妖精の神と宝物（前書き）

いるのかいないのかわからない話。

妖精の神と宝物

前の話から約2年たった！つまり、私とティナは5歳、カイトは4歳になった！正確に言うとなんと2年と3カ月ちよつとだね。

「ねー、ルエ、お願いー」

今、ティナにねだられてるんだよねー。なにをねだらてると言えば、
「つくつてよー。」

前の話で貰ったワンピース、着れなくなっちゃったからね。木箱にその布を縫いつけたんだよ。その出来がかなりティナ受けしたらしいんだよ。

「ね、お願いー。」

1週間前から、ずっとねだられてる。今日で4時間はたってるから、この1週間で35時間はねだられてるね。うん。

「もう、わかったから、材料費とか自分で用意してよね！」

「わーい、やったあ！」

「もう・・・、つかれた・・・。」

「勝者、ティナ。」

何か、カイト、ヘンなこと言ってるなー。

「カイト、勝者って、なに？」

ティナも、気になったみたいだね。

「さっきの、我慢大会みたいだっただろう？結局、姉さんが切れたから、勝ったのはティナ。」

「なるほどね。」

（3日後）

「できたよー。」

手抜きしたら怒られそうだったからね。真面目に作ったんだよ。

「わーい！ありがとう！宝物にするよー！」

あの、よくわかんない空間でも頑張ったんだよ。きつかったんだよ。

しつこいようだけど。

「そう言えば、ルエは、中に何入れてるの？」
気になるのそこ？ま、いいけど。

「一昨年貰ったリボンとチェーンだよ。ちなみに、盾〔シールド〕
で守ってる。」

「へー。じゃ、私も同じもの入れよう。」

「何々？何の話？」

「カイトとは関係ない話。」

「あ・・・、そう。」

妖精の神と宝物（後書き）

カイトはほとんど空気。ちょびつと出ただけ。この箱も、一応出ます。次の話に、ルエの決意を話します。（と、思います。）だから、あと3話か4話ぐらいでギルドへ入ります。アニメに入るのはそれから7話くらいですかね。（と、誰も聞いていないことをべらべらとしゃべる。）これから、【妖精の神が生きる道】を、よろしくお願いします。

妖精の神と決意とけじめ（前書き）

ルエが、フェアリーテイルにはいることを現実で言います。

妖精の神と決意とけじめ

前の話から2カ月！この作者、書いてる時間まちまちだから、報告があるんだよ。今日、お父さんが帰ってきて、お母さんがパーティの準備してるから、今、ティナの家で待ってる。なんで待ってるんだろ。疑問だ。

「ルエちゃん、カイト君、大変！」

あれ、近所のお姉さんだ。大変そうだ。どうしたんだろ。

「2人の家が・・・、火事になってる！」

「えっ！」

急いで、走って、着いた。本当に、火事だった。もう、火が、完全に回っていた。

「2人の居場所がわからなくって、もしかしたら、家の中に閉じこめられてるんじゃないんじゃないかと思ったけど、念のためティナちゃんの家に行ってみて正解だったわ。」

お姉さんは涙ながらに話していた。私も、涙が出てきた。あと、1つの疑問がわき上がった。

「おばさん・・・。私とカイトはどうなるんですか？」

立ち上がりながら、聞いた。

「私たちが責任を持って育てるわ。必ず。」

そうか、それならカイトは安心だ。

「私は、2年でいいです。育てて貰うのは、2年でいいです。」

「え？」

前に、イーリスに聞いたんだ。アニメが始まるのは、私が12歳の時だって。

「私は、7歳になったら魔導師になります。」

「え？」

振り返りながら言う。

「私は7歳になったら、魔導師になって、ギルドに入ります。」

最後の一言を、完全に振り返って、涙が出てるけど、笑いながら。

「魔導師ギルド、フェアリーテイルへ入ります。」

「ぼ、僕も!」「私も!」

「え?」

おばさん、混乱してるなあ。

「大丈夫です。ちょっとした魔法ぐらい使えます。」

一応、無「ナッシング」も使えるし。

「だから、私を育ててくれるのは、2年でいいんです。それだけで、充分です。」

あまり、この人達に、負担をかけたくないから。

「お願いします。」

おばさんは、少し悩んでから言った。

「・・・、わかったわ。」

「ありがとうございます。」

これが、私の決意。これが、私のけじめ。

「ありがとうございます。私、一生懸命、生きます。」

ありがとうございます。おばさん。

↓次の日↓

炎が、消えた。2つの亡骸が合った。きつと、お母さんとお父さんだと思った。私の部屋だったところを見ると、箱があった。あの、木箱だ。盾「シールド」で守ってあったから、無事だったんだ。そう考えると、涙が出てきた。

私は、生きる。私は、このことを忘れない。このことを忘れずに、生き続ける。

ありがとう。お母さん。お父さん。

妖精の神と決意とけじめ（後書き）

書いてないだけで、ルエも、カイトも、ティナも、魔法を使いこなしてます。一応。あと、無「ナツシング」も貰ったんです。1話を編集したので。

妖精の神と武器の誕生（前書き）

ル工、武器を作るの巻です。

妖精の神と武器の誕生

火事が起こって約1カ月。今は、あのよくわかんない空間にいる。で、どうでもいいけど思った。

「武器っているかな。」

「「「は?」」」

「・・・、3人そろって言わないでくれる。何か、悲しくなるから。」

「いや、だって、姉さんに武器って何か、似合わないような気がするからさ。」

「「うんうん。」」

「だって、カード単体じゃ限界があるよ。武器とカードの組み合わせだったら、結構幅が広がると思うけど。」

「でも、どうやって作るわけ。」

「イーリスから貰った能力で。」

「「あ、そっか!」」

「さっそく、実行しよっかな。」

「がんばれー。」

「んでさ、」

「「「ん?」」」

「どんなのがいいと思う?」

「「「そっから!」」」

「アハハハハ」

ふと思っただけなんだよ。考えとか、全然まとまってないんだよ。

「ルエにはさ、実用的なものが似合うと思うよ。」

「なんで?」

「なんとなく。」

「・・・」

「でも、それ僕も賛成だな。姉さんには、ちょっとかざりが着いた、

でも、ほとんどシンプルなものに似合いそうだなね。」

「・・・、何か、複雑。」

「一応作ってみろ。」

「命令しないで。」

「・・・（泣）」

「ま、いいや。作ってみよ。」

目をつぶりながら考える。イメージとしては、そのままでも充分攻撃力を持つような、剣「ソード」でも切れないくらい固くて、でも軽く、魔法に耐えられる武器・・・って、考え終わると、手の中に2つの固い感触。目を開けると、少し紅色と朱色がかった赤色の本体と、紙でできた紐みたいなのがついた、・・・なんて言うんだっけ、これ。エバーグリーンの上にもふもふしたやつがとれたやつ。

「これは、鉄扇だね。」

「ティナ、なんで知ってんの？」

「あのね、色んな武器の名前とか、『友那』の時、色々調べてたんだ。」

「へー。」

「一種のオタクだね（だな）。」

「カイト。イーリス。何かいった？」

ティナの笑顔が怖い。イーリスもカイトも汗だらだらだな。

「すみません。」

こうゆうのを、自業自得って言うんだよね。うん。

「とりあえず。」

2つとも高く放りあげて、剣「ソード」を出す。で、それで斬りつける。

「・・・なっ！血迷ったの（たか）！？」「」

無視。で、斬りつけたものを見ると、剣「ソード」に刃こぼれこそないものの、鉄扇？本体にはもちろん、紐の部分にすら傷一つない・・・鉄扇って言いにくいな。今度、名前を付けよう。

「「「「おお。「」「」」

思ったより、すごい。

「次は。」

鉄扇に、火「ファイアリー」をまわせてみる。

「できた・・・。」

こんなこともできるんだ。

今度は、火「ファイアリー」だけじゃなくて、雷「サンダー」もま
とわせる。

「あ、そうだ。みんな、ちょっと離れてて。」

「「「え？」「」」

「いいから早く」

みんな、頭に？マークがついてるよ。ま、とりあえず離れて貰った
から、実行してみよう。

「炎電の舞」

鉄扇を広げ、高く飛び上がる。腕をクロスさせ、また開く。すると、
組み合わさった魔法が蛇行する。

「うひゃー」

「色々すごいね・・・。」

「「うん・・・。」」

「ひどい。ま、でも、これで魔法の幅が広がるね。」

「「「幅が広がるどころじゃないと思う（よ）（ぞ）・・・。」」」

「え？」

「「「何でもない。」」」

「じゃ、いいや。」

新技、開発しよ。

妖精の神と武器の誕生（後書き）

一応、これも使います。使わなかったら話に出した意味がありませんし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1817y/>

妖精の神が生きる道

2011年12月25日15時51分発行